

生きた授業

“がんばれ消防”

と書かれた法被を着て甲斐麻美さんが、

こぶしを上げている。英字新聞のトップ記事だ。麻美さんが敬礼している消防庁のポスター。それをまず見せて、この英字新聞を訳させる。目をキラキラ輝かせて生徒は辞書を引く。本校英語の授業風景。授業をビシッと楽しく決める特急ワザである。小中学校では、楽しい授業研究が盛んだ。しかし、今や高校でも生きた教材を先生方はいつも求めている。昔みたいに「わからん奴は赤点だ」と怒鳴っている時代ではない。生徒に興味を持たせる。興味を持つたら自分で解答を求める。そして進んで学ぶ。それが私どもの願い。

国府高校三年の時、マジレンジャーでデビューした甲斐麻美さん。まさか英字新聞に載って、母校の後輩が辞書を引き引き、その活躍を喜ぶようになるとは、思いもしなかった事だろう。小さな一歩から大きな一歩は始まる。麻美さんの大きな一歩を私どもは応援したい。

平成二十年 三月二十八日

国府はがき通信

No90



旅立つ

「創造の英知、磨く若草よ、泉心の学び舎よ」岩代浩一先生の校歌が掲げられている体育館。昨夜からの冬雲は去っているが、風は冷たい。中央に椅子が百個ほど並べられている。その上に携帯用カイロ、ストーブが二個。二月二十三日（土）午後二時、本校演劇部卒業公演、寒さなど忘れて、グイグイ引き込まれていく。巧みなセリフの言いまわし、自然な動作、思わず声を出して笑ってしまう楽しさ。照明、効果音、そこに創造の英知があり、色あせない青春があった。小さな舞台かも知れない。少ない観客かも知れない。けれど、きつと、きつと次の舞台が用意されているはずだ。人は最初から大きな舞台に上がるものではない。若い人にどれだけ多くの小さな舞台を用意出来るか、それが大人の責任のような気がする。卒業、高校という小さな舞台から、次の大きな舞台を目指して、毎年、毎年、多くの人が旅立つ。今日もまた、キラキラ輝いた若者が旅立って行った。

平成二十年 三月十四日

国府はがき通信

No88



この一日があるから

「自分らしく生きるといふ事はどういう事なのか。立派な塔や、神社仏閣を建立するには、風雪に耐えたくせのある木が良い。人間も苦勞し、自分を磨いて、はじめて個性が出来る。自分が出る。それが本当の自分らしく生きる事である。」格調高い理事長祝詞、眉をあげ、手は膝に置いて卒業生が聞く。「ありがとございしました。」と指導ばかり受けていた生徒が退場する。先生の目には涙、涙。そして謝恩会。どんぐりまなこに坊主頭、ドスの利いた声、サングラスを掛けたら怖い人に間違われそうな関先生。その先生がなんと、エレガントにピアノを弾いている。それに合わせて歌う美人ソプラノ歌手。楚々とした着物がまぶしい。学年主任の本山先生だ。昨日まで柳眉を逆立てて、叱っていた先生とはとても思えない。この一日があるから、また担任をしたくなる。この一日があるから、教師は生きていける。この一日があるから、教師は自分らしく生きていける。

平成二十年 三月七日

国府はがき通信

No87



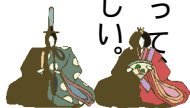
お雛さま

朝日の中にぼんやりと浮かび上がってくるお雛さま。今、本校で一番美しい場所である。「あかりをつけましょ、ぼんぼりに」女生徒が歌っている。ぼんぼり。白い紙に窓を開けて、その中にろうそくを灯す。雪洞とも書く。雪の洞の中の灯りに似て、あでやかである。真つ暗なお部屋の中で、ぼんぼりの灯がとる。ほのかな明りがお雛さまを浮かび上がらせる。そこで女の子達が甘酒をいただいたり、三色のあらをいただく。ひし餅や雛あられに見られる白、青、桃の三色は、それぞれ雪の大地（白）、木々の芽吹き（青）、生命（桃）を表していると言う。この三色のお菓子をいただくことによって自然のエネルギーを授かり、健やかに成長して欲しいという親の願いがある。日本の美はこの自然の美しさと共にある。それはまた、闇の世界から生まれる。漆黒の闇があつて、夜明けの美しさがあり、漆黒の闇があつてぼんぼりのあでやかさがある。だから本校のお雛さまも早朝が一番美しい。

平成二十年 二月二十九日

国府はがき通信

No86



挑戦する心

「古里で同級生リレー」新聞の見出しが飛び込んで来ました。

「頼むぞ岩見」「早く来い後藤」昨年九州一周駅伝で、福岡県チームの日間首位の立役者となったのが、四区後藤孝光選手と、五区岩見和明選手、二人は同級生。一緒に都大路を駆け抜けた仲間です。高校時代とは喜びと悲しみを共有しながら挑戦し続ける事ではないでしょうか。教育とは、その心を育てる事ではないでしょうか。今、国府高校はその心を持った仲間が大きく広がっています。先日の熊日駅伝でも卒業生、在校生合わせて、なんと十四名も出場したのです。優勝した熊本市のアンカー、葦田陽司選手(平成十年卒)その熊本市を激しく追い上げて区間賞を取った阿蘇郡市の園田隼選手(本校三年)。また全国で有名になった箱根駅伝の学連選抜で五人抜きを演じた上武大学の福山真魚選手。この人達は夢を追いかけ、常に挑戦する心を持った人達です。夢はあきらめた時、夢になり、失敗は挑戦をやめた時、失敗になる。

平成二十年 二月二十二日

国府はがき通信



美しい先生

飛梅を見に、大宰府天満宮に行った。寒空に凜として、花が咲いている。「東風吹かば、にはひおこせよ梅の花、あるじなしとて、春な忘れそ」菅原道真の歌である。これを聞いた梅は、道真の後を追って、京の都から一晩で、大宰府まで飛んできた。だから飛梅という。「私の後を追いかけて来るのは、埃だけだなあー」なんて、つぶやいていたら、後ろから肩をたたかれた。知り合いの中学の先生。「クラスの生徒の合格祈願に来ました。」飛梅を見て、餅でも食べよう）なんて思っていた私は、ただただ恥じ入るばかり。先生という仕事は教える事も大切、厳しい躾も大切、けれど休みの日に、こうして大宰府まで行って、生徒の為に祈る先生はとても美しい。きつと、この先生のクラスは生徒ひとりひとりが、のびのびと深呼吸出来るクラスに違いない。先生の後を追って、梅の香が追いかけていく様な気がした。

平成二十年 二月十五日



国府はがき通信

No84

女優 甲斐麻美

パチパチという音に目が覚めた。外が真っ赤だ。目の前
の家が燃えている。「火事だ」と叫んで飛び出した。もう地域の消防団が消火
に当たっている。てきぱきと動く団員の方々、瞬く間に火は消えていく。私
は初めて、地域の消防団の活躍をこの目で見、その重要性を知った。玉名に
住んでいた五年前の事。かつて、一百万もいた消防団員が今では九十万を割
ったという。先日熊日の朝刊に「大沢親分が消防団を応援」という見出しで、
記事が出ていた。消防庁が主催して、消防団のPRの一大キャンペーンが始
まったのだ。その啓発ポスターのモデルとなっているのが本校平成十七年卒
の女優、甲斐麻美さん。黒いキラキラした瞳を上げて、敬礼している姿が凛々
しい。「一歩、一歩、ステップを踏んで、上を目指します。」と語ってくれた
彼女。全国の津々浦々に貼られるこのポスターが団員確保に役立ったらどん
なに嬉しい事だろう。それはまた、私どもの切なる願いでもある。

平成二十年 二月 八日

国府はがき通信

No83

悔しがれ

「前期選抜平均二、八〇倍」大きな見出しが踊ります。中には九倍以上の倍率の高校もあります。それだけ不合格者が出るということ。中学の先生方は、合格者を喜ぶ前に不合格になった生徒をどう励ますか、その事で頭が一杯になるのではないでしょうか。「悔しがれ、悔しきは夢の第一歩。物事は簡単にはいかない。そんな時は、悔しがれ。そして、悔しさを見つめる。悔しがるということは、エネルギーになる。涙が出るくらいの悔しい思いこそが大切なのだ。悔しさをバネにする。努力、努力……。頑張る。頑張る……。積み重ねることが大事なんだ。そんな前向きな気持ちこそが、いいきっかけにつながっていく。」（星野仙一）私どもの学校にも前期、後期と不合格になってやって来る生徒がいます。そんな生徒にこの言葉を聞かせます。悔しさをきっちり見つめてバネにした生徒が、九大、熊大、筑波大などに合格するのです。

平成二十年 二月 一日

国府はがき通信

No82

メダカ先生

いたるところに水槽がある。苔むした水の中にメダカが泳いでいる。その数、数万匹。まわりにシクラメンが咲いている。これも数百鉢、小屋が三軒。モーターの音がする。池がある。その中に金魚が泳いでいる。色とりどりの金魚。何千匹いるかわからない。エサをばらまいている人がいる。杉本日出夫先生。エサの量も半端ではない。大きな袋がいくつも無造作に置かれている。「なんで、こんなにメダカとか金魚を養っているのですか。」私が聞くと、「中学校で実験やら、観賞用に使っていたのが嬉しいのです。」と笑顔で応えられた。先生は中学校で長年理科を教えられていた。職人である。やりだしたら徹底的にやる。そして教師である。自分の事は二の次にして教える。それが生甲斐である。理科の実験、あるいは観賞用で金魚、メダカ、シクラメンを御入用の学校はご一報いただきたい。杉本日出夫先生は、益々元気になるのである。

平成二十年 一月 二十五日

国府はがき通信

No81

高校を受験する君へ

青空に向けて、ふくらみかけては　　厳しい風に　　また身を引き締め
春の陽射しを待ちわびている君

力いっぱい試練を乗り越え　　光の束をつかみ取って下さい

生命いっぱい、めざす道を駆けぬけ　　生きていく喜びを胸に
寒い風の中を進んで下さい

風はやがて暖かくなる。きっと暖かくなる
心にこんな太陽が輝いているのだから
国府高校は君を待っています。

平成二十年　一月　十八日

国府はがき通信

ちいぢやな門松

「偽装、偽証、偽善、偽名に偽造あり、偽偽、偽偽、偽偽と軋む日常」。昨年はこんな言葉で終始した一年でした。今年は「信愛、信用、信実、信義に信頼あり、信信、信信、信信と深まるきずな」と、こんな年にしたいものです。そのためにも、いつもちよっとした事に、心豊かな気配りを持ちたいと願っています。

本校の職員トイレの洗い場にちいぢやな、ちいぢやな門松が飾ってあります。竹のまわりを松が囲み、真ん中に梅の花があつて、それを水引きで結んで輪をつくり、上に伸びています。ちいさいけれど、見事な門松です。心が深く、豊かになります。人が生きていく上で、このような目立たないところでの心配りが人の世を明るくするのではないのでしょうか。それが信義に満ちた日々とするのではないのでしょうか。

このちいさな門松に、自然と笑みがあふれて、今年も始まりました。

平成二十年 一月 十一日

国府はがき通信

No79

年満月

「君の心がゆれる時みんなの顔が満開になる」高文連に入選した藤本雅子さん（普通科二年、東陽中出身）の標語です。心を固く閉ざしていた友人が、みんなの励ましによって、少しずつほぐれてくる。それを見たみんなの顔も笑顔になる。そのような意味だそうです。彼女は国体、インターハイ出場の投擲の選手、競技は個人競技ですが、いつもチームの和を大切にするやさしい生徒です。終業式でこの言葉が紹介されて今年も終わりました。さまざまな思いが満ちた一年でした。十二月の事を年満月とも言います。いろいろな事が満ちている月、一年の思いが一杯に詰まっている月、その十二月もあと数日を残すところとなりました。思いやりのある、あたたかな心で皆の顔が満開になる、そんな年の瀬でありたいものです。今年一年、熊本国府高校はがき通信、ご笑覧いただきましてありがとうございます。良いこと、美しいこと、素晴らしきこと、みんな花束にして新年をお迎えください。

平成十九年 十二月 二十七日

国府はがき通信

No78

小さな積み重ね

「いま小さなことを多く積み重ねることが、とんでもないところに行くただ一つの道なんだなというふうに感じています」イチロー。

朝八時三十分。生徒がこの言葉を一生懸命に書き写しています。十分間の書写などというのは、実に小さなこともわかりません。しかし、小さなことを、積み重ねることが、育てるということではないでしょうか。学校というのは、目立たないけれど、いろいろな所で積み重ねを続けています。十二月の「ほけんだより」には、エイズを知ろう！～大切な人を守るために～という記事がありました。このようにして生徒は教科書以外にも多くの事を学び成長していきます。今日も筑波大学、北海道教育大学、熊本県立大学と国立大学に次々と飛び出す生徒の報を聞きました。私どもは、小さな積み重ねが、とんでもない所に導くのだということを感じて、合格した生徒にも補講を続けるのです。

平成十九年 十二月 二十一日

国府はがき通信

No77

幸せ

「満たされなくて、落ち着かない。私は赤いランプのついた車、何かを求めて走っている。まわりは、はなやかな品物ばかり。便利で楽しいはずなのに、心はいつも北の風」ある生徒のノートに、こんな落書きがあった。

「遙かなる苔の細道を踏み分けて、心ほそく住みなした庵、木の葉に埋もる懸樋の雫ならではつゆおとなふものなし」この生徒をこんな場所に連れて行きたい。電気もなければ、携帯もない、あるのは煌めく夜空とおいしい空気。もう三十年も前、煙草を吸った生徒を四人見つけて、「やめろ」と言ったら、「やめられません」とぬけぬけと言った生徒がいた。その生徒達に三十キロの荷物を背負わせて、十日ほど竹田、七里田温泉、大船、法華院、久住、黒川と歩いた事があった。山での生活で、彼らはきっぱりと煙草をやめた。今でもその生徒達は言う。「あの時は楽しかった。」無期停学であんなに叱ったのに……。人は何もなくても心が満たされれば幸せなのかも知れない。

平成十九年 十二月 十四日

国府はがき通信

No76

日の当たる場所

人として一番うれしい事は、自分の努力を他の人が分かってくれた時ではないだろうか。ちよつとした頑張りを認められて、引き立てられると疲れも吹っ飛ばし、新たな意欲も湧いて来る。そして気が付くと、いつの間にか自分が日の当たる場所に立っている。本校の卒業生で日の当たる場所に立っている生徒がいる。熊本学園大学の松本拓君、大学で特待生になり、韓国、大田大学に交換留学生として学ぶ。崇城大学の古川祐輔君、十一月に韓国釜山で行われた国際会議で研究発表。ルーテル大学の森崎慶成君、NTT西日本に就職。下塚直人君、熊本日産に就職。熊本県立大学の淵上隆一君、英語教師を目指して勉学中。他に本校は九大を始め、国公立大に毎年十名前後の合格者を出しているのであるが、こうして地元の大学で活躍している生徒も多い。結局どこの大学でも、その大学で、どう努力し、どう認められて、日の当たる場所に立っているか、それが一番大切なような気がする。

平成十九年 十二月 七日

国府はがき通信

No75

もみじ

紅葉が美しい季節になった。「もみじ」は、「もみ出ず」が変化したもの。色かもみ出されるという意味。夜の冷え込みの厳しさの中で、それに耐え、それを乗り越えて、それを糧にして、美しくなる。そんな紅葉のあつぱれさが心を打つ。本校の卒業生の中にも、厳しい音楽の道に飛び込んで、自分の色をもみ出し、美しく輝こうとしている人がいる。ドイツ・アウグス国立音楽大学に昨年十月入学した山田善裕君、武蔵野音大を卒業、フランスで三年の留学、そして、ドイツ。彼はきっと、何度も何度も道に迷った事だろう。誰も知らないヨーロッパ。厳しい現実が自分の成し遂げる道に立ちただかる。しかし、今日あきらめてしまえば、明日の日はない。夜の寒さが厳しければ厳しいほど紅葉は鮮やかに木々を飾る。人もまた厳しい日々があればあるほど美しく人生を飾るもの。彼が艶やかな人生を飾ってくれる事を切に祈るのだ。

平成十九年 十一月 三十日

国府はがき通信

No74

国府高校市場

かつて、健軍の街は西部劇に出てくるような活気ある街だった。人々は行き交い、店は次から次へと広がって行った。映画館が出来た。ボウリング場が出来た。近くは御船、益城、遠くは矢部の人々まで健軍で買い物をし、健軍で食事をした。自衛隊の方もこの街では制服で歩けた。しかし、気がつくと、いつの間にか街から人がいなくなった。そして、あちこちで空き店舗が目立つようになった。あのぬくもりがあり、優しさに満ちあふれた街に北風が吹き始めているのだ。今、健軍の街は必死になって昔の活気を取り戻す取り組みがなされている。「健軍文化交流フェスティバル、健軍よかもん市」。もう十四回を迎える。十一月二十四日（土）、二十五日（日）、本校も「国府高校市場」を出店する。商業科会計ビジネスコースが中心。生徒の対応はぎこちないかも知れない。しかし、商品には絶対の自信がある。阿蘇の農家直送の野菜類が並ぶ。ご来駕賜ればこれ以上の喜びはございません。

平成十九年 十一月 二十二日

国府はがき通信

No73

露

誰にもいはずにおきませう。
朝のお庭のすみっこで、
花がほろりと泣いたこと。

もしも噂がひろがって
蜂のお耳へはいつたら、

わるいことでもしたやうに、
蜜をかへしに行くでせう。

金子みすゞ

ボールペン三本

かすかに香水の香を風にのせて、卒業
生が入って来ます。

ボールペン三本、そつと筆立てに入
れています。

「在学中に、ここからボールペンを
持つて行ったまま、まだ返していま
せん。すみません。二本は利息です。」

そう言つて、香りを残したまま、
出て行きました。

秋の日が、やさしく入ってくる
進路指導室です。

平成十九年十一月十六日

国府はがき通信

No72

見守っている

私どもは、ふだん、お互いが生きていくのに、他の人が自分にとって、とても必要な人であることに気付きません。いつの間にか、ゆるやかに時は流れ、お互いが必要であることを知る時は、その人がいなくなつてからです。本校の正門を通つて、南フランスの建物のような校舎の階段を上ると、左側が事務室です。その正面に、大きな柱時計があります。

いつも、いつも正確な時を刻んで、私どもを迎えてくれます。その時計の横を見ますと、平成九年、十二月吉日、津留、と記されています。本校在学中、交通事故で亡くなつた生徒のご両親からの寄贈です。わが子がこの学校に在学した証しに、という親の心がこめられています。学校は出会いの場、友と出会い、師と出会い、知と出会う。確かにあの時、日差しの差し込む本校で、津留君には多くの出会いがありました。その彼が輝いた場はいつまでも輝いて欲しいと、時計は見守っているような気がします。

平成十九年 十一月 九日

国府はがき通信

No71

ゆかりとここの名のせんべい

「ゆかり」という名のせんべいを食べた。えびが持つ旨味、香ばしさが楽しい。説明書にこんなことが書いてある。「時代が移り変わっても、ずっと変わらないもの、それは人と人とがご縁で結ばれているということです。さまざまなお会い、つながる気持ち、そして分かち合う喜びや楽しさ、人々のあたたかな毎日がたくさんのご縁でつくられています。・・・」このせんべいを持ってきたのは、就職が決まった生徒の保護者、「私の子供は二人、国府高校にお世話になっております。このたび長女が地元でNOKという立派な会社に決まりました。これも国府高校のおかげです。ありがとうございます。」品の良いお母さんだ。お礼に「ゆかり・縁」というせんべいを持ってこられた。その心配りがうれしい。国府高校で出会い、国府高校で縁が出来、国府高校でつながる。そんな家族のあたたかさが、じっくりしみ込んだせんべいである。

平成十九年 十一月 二日

国府はがき通信

No70

英語を話そう会

ジンバブエ共和国、アフリカ南部の国。日本より、やや大きな面積、人口約千三百万人、首都はハラレ。十二世紀に栄えたグレードジンバブエの石の遺壁がある。ザンビアとの国境にあるヴィクトリアの滝が有名。イギリス領、南ローデシア時代は農業、鉱業、工業のバランスが取れた豊かな国であった。長い民族自立の戦いの結果、一九八〇年独立、しかし、その結果、白人農家の消滅により経済の崩壊が始まっているという。その国から本校へ英語の先生がやって来た。名前はチクワナ・アイザック・トンデライ。本国では医師の免許を持つ。奥様は熊大医学部大学院の留学生。品格あるイギリス英語を話す。向学心に燃え、日本語が読めるようになりたいと、今漢字の猛勉強中。叡智に輝く瞳が美しい。本校では、さっそく先生方を中心とした「英語を話そう会」が発足。今のところ十名の先生方が英会話を楽しんでる。この会がジンバブエと日本の架け橋になる日は近い。

平成十九年 十月二十六日

国府はがき通信

No69

思い差し

「生徒の写真が今朝の新聞に載っているそうです。」「どれ、どれ、どこにあるの。」「朝礼の前の職員室、みんな新聞を覗き込みます。一頁、一頁、広げて探すけれど見つかりません。」「国体の記事だそうです。もう一度スポーツ欄を見ます。」「あった、あった、これかあ。」「閉会式の写真に、確かに本校の前田さんが載っています。熊本県選手団の大勢の中に笑顔で写っています。小さな写真です。」「もっと大きく取り扱ってもいいよなあ。」「みんなでワイワイ言っています。」

「思い差し」という言葉があります。本来はこの人と思って、心をこめてお酒をつぐという意味です。生徒のひとりひとりに、愛情のぶどう酒をついでいる、これが先生の思い差しだと思っのです。きつと生徒達も、この先生方の愛情を持って差された杯を、心をこめて「思い取り」して呉れることでしょう。今日は私も思い差しのお酒を求めて街に出たい気分です。

平成十九年 十月十九日

国府はがき通信

No68

変な世の中

近頃、私の携帯に変なメールが入る。英語で届くものもある。気が小さい私は、こんなわけのわからないメールが入ると、ときどきしてしまう。法外な料金を請求されるのではないか。生徒に見られたらどうしよう。あわてて、店に行つて拒否リストに入れて貰う。しばらくは入らない。しかし、一ヶ月も経つと、またメールが入り出す。気味が悪い。メールでいじめられた。メールで恐喝された。こんな事件が頻発している。自殺した高校生まで出た。本校の野球部は携帯禁止である。携帯に払う金があつたら、「牛乳を飲め、いりこをかじれ、めしを食え」である。やっと定着してきた。子供より親が理解してくれるのに時間がかかる。子供が携帯を持っているのは日本だけだとか。自分で遊ぶ金は自分で稼げが外国の親。日本の親はせつせと働いて、子供にお金を使っていた。子供はパチパチとメール友。本も読まなければ、手紙も書かない。変な世の中だ。

平成十九年 十月十二日

国府はがき通信

No67

石にはならない

風が吹いた。新しい風が吹いた。パークドーム熊本。今日は本校の体育大会。バトンガールを先頭に入場行進。各団、思い思いの趣向を凝らしての行進。先生方も、ユニホームを着ている。背中に火焰万丈と書いてある団もある。先生が燃えているのだ。この気持ちが生徒に伝わらないはずはない。一生懸命に競技する生徒。常に走り回って、準備する生徒。そして、応援合戦。そこにはデカデカと刺繍をほどこした服はない。ブラブラ歩くだけの応援団はいない。学生服をスマートに着こなしての応援団。さわやかである。各学校、この応援団に頭を痛める。突然、モヒカン刈りで登場したり、練習という名をかりて、下級生をいじめたり、恐喝したり、教育以前のトラブルがどこにもあった。本校にはそれが無い。生徒、先生の準備委員会を組織して、何度も何度も検討した結果である。何もしなければ、何も起こらないけど、何もしなければ、石になってしまう（阿久悠）本校は石にはならない。

平成十九年 十月 五日

国府はがき通信

No66

どぎゃんか ならんかい

「お前、その髪はどぎゃんかならんかい。浴衣を着て、柳の下に立つたら幽霊だぞ。」朝の職員室で生徒が指導を受けています。シャツをズボンに入れて、なんとか見られるようになりました。そして、この生徒は、なんと全職員の前に立ったのです。素晴らしい事をしました。電車で痴漢行為をしている男を三百メートルも追い掛けたのです。今朝は感謝状伝達式、逃げた男は二十九歳、「夢中で追い掛けました」と生徒は小さな声で話します。しかし、勇気がなければ出来ない事です。「日本の若者は、自分のしたい事はするけれど、人として、しなければならぬ事をしない」とよく言われています。確かに、髪型、服装だけを見たら、今の若者は駄目だ、日本人らしい日本人はいなくなっただけだと思ってしまう。嬉しい事に、今朝は、それを見直す事が出来ました。けれどやはり思うのです。その髪、その格好、どぎゃんかならんかい。

平成十九年 九月 二十八日

国府はがき通信

「死にたい」、九月の声を聞くと、こんな事を言って、心配をかける生徒が出て来ます。いろいろな対応の難しさに、夏の疲労が重なって、こんな気分になるのでしょうか。こんな時は、黙って聞くだけです。生徒の苦しみを共有は出来ないけれど、苦しんでいることを認めることは出来ます。生徒に関心を示し続ける事は出来ます。

そして、私はいつも、こう言うのです。「君があのに逝っても、知らない人ばかりだろう。知らない人ばかりに囲まれていることを想像してごらん。背筋が寒くなるぞ。どうせ、私たちが先にあのに逝くから、その時を待って、ゆっくりあのに逝きなさい。」やがて、元気になった生徒が、こんな心配をしてくれます。「先生、あまりお酒ばかり飲まないで下さい。早くあのに逝ったらだめですよ。僕はまだまだ生きていきます。先生、ひとりぼっちになりますよ。」

平成十九年 九月 二十一日

国府はがき通信

栄養ドリンク十本

「遅くなりましたが、どうしてもお礼を言いたくて電話をしました。夏休み中に長嶺のビデオ屋さんで、財布を落として、気付かなかったところ、国府高校の生徒さんが、親切に拾ってくれました。部活動の生徒さんだと思います。一年生だと言っていました。私の知り合いも国府に行ってますが、評判が良いと聞いています。とにかくお礼を言いたくて、お電話をいたしました。」小山様という方からの電話である。朝礼でこの報告があると、職員室に笑みがあふれます。学校現場は、常に何かが起ります。その対応に追われる日々、教材研究、クラス運営、課外指導、学校行事、進路指導、部活動……。先生方は実に、実に、一生懸命です。早朝、六時にはもう登校している先生もいます。こんなにしても目に見えて成果が上がらないもどかさの中で、こんな嬉しい電話があります。栄養ドリンク、十本ぐらい飲んだ気分になるものです。

平成十九年 九月 十四日

国府はがき通信

ふたりの三年生

「ワッショイ」「ワッショイ」ふたりの三年生が空に舞う。このふたりは、本校の野球部が発足した時に二年生で入部して来た。優秀な下級生の中で、球を拾い、水を撒き、トンボを引いた。しかし、レギュラーの座を結局、取る事はなかった。今日は、そのふたりの送別会。紅白試合の監督をしたり、焼肉を食べたり、「先輩、先輩」と言われて、生き生きとしている。そして、胴上げ。ふたりの高校野球は終わった。このふたりは、本校の野球部が流れ始めた最初の一滴だと言えよう。今はもう、この一滴は川となり、岩を穿ち、砂礫を舞い上げ、谷を下り激流となって走り出している。いつの日か、本校野球部が大河となって、甲子園で活躍する時、このふたりに胸を張って、「私たちが最初の野球部卒業生です」と言っただけでいい。また、そういう野球部に育てたい。暮れかかった夏の空に、若者の明るい声を聞きながら、強くそう思うのである。

平成十九年 九月 七日

国府はがき通信